

とうきょう すくわくプログラム活動報告書

施設名	あらい保育園
施設所在地	日野市新井3丁目 1 番地 3
自治体名	日野市

1. 活動のテーマ

<テーマ>

感覚

<テーマの設定理由>

(テーマに関する子どもの興味関心、園の特色など)

本園は広い園庭とホールを有しており、子どもたちがのびのびと体を動かしながら、さまざまな環境に触れられる環境が整っている。日々の遊びの中では、自然や遊具、素材などに興味をもち、見たり、触れたり、聞いたり、感じたりする姿が見られる一方で、感じ方や興味・関心には個人差が見られた。そこで、さまざまな遊びや体験を通して五感を十分に働かせ、自分なりの気づきや発見を楽しむ経験を積み重ねることで、豊かな感性や表現力、探究心を育むことを目的として、本テーマを設定した。

2. 活動スケジュール

期間：令和7年12月～令和8年3月（不定期実施）

- ①R7年12月（導入期）遊具との出会い。「やってみたい」という興味関心を広げる。保育者と一緒に体を動かす心地よさを味わう
- ②R8年1月～2月（展開期）「少し難しいけどやってみよう」という挑戦心や「どうやったらできるかな」と試行錯誤する環境を設定する
- ③R8年3月（まとめ期）友だちと協力したり、遊びを展開しながら達成感と次への意欲へとつなげ、繰り返し挑戦する面白さを友だちと共有していく

3. 活動のために準備した素材や道具、環境の設定

(活動のためにどのような環境を設定したか、準備した素材や道具)

- ホール：マットや平均台、トンネルなどを組み合わせたサーキット遊びを構成し、子どもたちが自ら選んで挑戦できる環境を整えた
- 園庭：かけっこ、鬼遊び、ボール遊びを実施したり、2輪キックスケーター、パカポコなどを設置したりし、広い空間を活かしたダイナミックな運動遊びができるよう完了を整えた。

4. 探究活動の実践

<活動の内容>

当園の広いホールと園庭を活用し、サーキット遊び、ボール遊び、リレー、平均台、マット運動などを実施した。子ども自身が自分で遊びや挑戦する種目を選択できる環境を整え、「やってみたい」という気持ちを大切にしながら活動を進めた。また、年齢に応じて活動内容を工夫した。

<活動中の子供の姿・声、子供同士や保育者との関わり>

(活動の内容、活動中見られた子どもの姿、保育者との関わり等)

【1・2歳児クラス】ホールで軽量マットでの山登り、透明トンネルくぐりを活用。しゃがむ・四肢をバランスよく動かすなど、保育士が先頭だてで行うと一緒にやる姿が見られ、「自分でやる」という主張が強まっていた。また、2歳児では、順番を待つ意識が芽生えていた。

【3歳児クラス】ホールで軽量マットやバランス平均台、トランポリンを組み合わせストーリー仕立ての探検遊び。川を想定し、落ちこちたら食べられちゃうという見立ての世界を楽しみながら途中で落ちて「もう一回やる」と自ら繰り返し挑戦していた。 【4・5歳児】スピード感のあるサーキット遊びを繰り返し楽しむ中で、2枚の軽量マットでのキャタピラーつくりを子どもたちから提案。保育者は、子どもたちの発想を見守り「どうやったらつながるかな?」と問いかけたことで、子どもたちはマジックテープの位置を合わせたり、継ぎ目を手で押さえたりと試行錯誤を開始。保育者と相談する中でアイデアを具現化させ、ダイナミックに転がる遊びへと展開させた。

乳児
クラス



幼児クラスになると同じ遊具でも遊び方が変化

幼児
クラス



変化



変化



5. 振り返り

<振り返りによって得た先生の気づき>

広い空間を活用した遊びを通して、子どもたちは全身を使いながら、さまざまな感覚を働かせる姿が見られた。特に今回のマットキャタピラーの事例では、保育者が子どもの発想を受け止め、その思いを形にする支援を行ったことで、子どもたちは素材の感触や体の動き、友達との関わりを十分に感じながら遊びを発展させることができた。また、既存の遊具で遊ぶだけでなく、自分たちで環境を工夫して遊びを広げる姿が見られ、感覚を通して得た気づきや発見を遊びへとつなげる力が育まれたと考察した。